
ボンゴレの掟

明美

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ボンゴレの掟

【Nコード】

N8268M

【作者名】

明美

【あらすじ】

ボンゴレを創立した頃の一世と六人の守護者。彼らは出会い、絆を深めながら強くなっていく……。一世がボンゴレを創った理由とは？若きボンゴレを次々と襲う苦難とは！？

『少年』

「覚悟……か……」

少年は独り言のように呟いた。

月明かりの下、彼らがいるのは、普段は誰も立ち入ることのない荒れた裏通り。

闇にも映える赤い髪と、顔の右側から首にかけての入れ墨が印象的な彼は、何かを見定めるような目で手元を見つめていた。

少年の手には、漆黒に輝く箱が乗っている。

少年はそれを軽く放り投げた。

真上へ跳んだ箱は、一旦空中で静止してから、再び少年の手に戻ってくる。

受け止める瞬間、ずしりとした重みが少年の身体に響いた。

もう一度投げ、また受け止める。

彼はそれを何度か繰り返した。

その度を感じる箱の重さを味わうかのよう。

「……そんなの、とっくの昔にできてるさ」

少年はまた箱を投げた。

今度は少し強く……隣にいる、もう一人の少年に向けて。

月に煌めく金髪に、漆黒のマントを纏った少年も、何も言わずに箱を受け取めた。

彼も、見た目以上の箱の重さを感じているだろう。

彼は箱を持ち直すと、箱の上半分をゆっくりと開いた。

中には、それぞれ違った刻印が刻まれた指輪が七つ、綺麗に並べて納められていた。

この箱は、指輪を保護するためのケースだったのだ。

——本物の覚悟が必要な時……

——この指輪が、力を貸してくれる……

彼は七つの中から、竜巻のような形の刻印が刻まれた指輪を手にとった。

月に翳すと、その明かりを赤い光に変えて鈍く輝く。

「この指輪は……お前に似ているな」

少年は少し微笑んで、指輪をケースに戻した。

「常に自らの色を持ち、決して他の色に染まることはない」

彼の言葉に、入れ墨の少年はふっと笑った。

「俺は“嵐”か……」

“嵐”……それが刻印の意味であり、指輪の属性。

「当然だ」

彼はそう言うと、金髪の少年が持つケースから嵐のリングを抜き取り、それを自分の右手の中指に嵌めた。

「赤は俺の色だ……てめえに赤は似合わねえ」

彼の言葉を、金髪の少年は微笑んだまま聴いていた。

しかし、理解してはいないだろう。

彼の言葉の、本当の意味を。

しかし、彼はそれでいいと思っていた。

一生、知らないままで……。

「……俺が染まらない色だというなら、てめえは逆だな」

彼はケースの中央に納められている、ひとつだけ形の違う指輪を取りだした。

「てめえは全ての色に染まる……いや、受け入れる」

そのリングには彼の赤を含む、虹と同じ七色が刻まれていた。

「そして、受け入れた色全てが、てめえの色になる。大空に架かる虹のようにな」

彼は指輪を金髪の少年に差し出した。

「どんな色も、受け入れてくれる空がなけりや輝けねえ。だから、俺はてめえについていく」

「……オレが……お前の空になれるのか……？」

金髪の少年は不安気な表情だったが、赤毛の少年は当然というように笑った。

「……もうなっぺんだよ。俺の空はてめえだけだ」

「……そう、か……」

金髪の少年も微笑むと、差し出された“大空”のリングを受け取

り、同じように指に嵌めた。

「それで、これからどうすんだ？」

入れ墨の少年の問いに、金髪の少年は少し悩んでから答えた。

「日本へ行く」

「……日本？」

入れ墨の少年は不思議そうな顔をした。

「そこに友人がいるんだ……彼に……」

金髪の少年は、ケースに納められている、雫のような形の刻印が刻まれた青い指輪に視線を落とした。

「この……“雨”のリングを渡したい」

「……そうか……」

入れ墨の少年はそれだけ言うと、先に歩き始めた。

「そうと決まれば、さっさと行くぞ。てめえが推薦する雨の守護者、どんな奴か見てみたくなった」

「……ああ」

ケースを閉め、金髪の少年も歩き出した。

もう夜が明けようとしていた。

『雷の守護者』〜危機〜（前書き）

何故か『雨の守護者』ではない点は後々
成長途中のランポウがウザイ

『雷の守護者』〜危機〜

「お坊ちやま、お勉強の時間でございます」

家政婦の女性が分厚い本や参考書を抱えて部屋に入ってきた。

「……そんなの、俺様には必要ないんだものね」

しかし、部屋の主はそんな家政婦に見向きもせず、豪華なベッドの上で退屈そうに寝転んでいる。

「お坊ちやまは、いずれこの土地を引き継ぐことになる、たった一人の後継者なのですよ？ 必要ないことはございません」

彼の不真面目な態度には馴れているのか、全く動じることなく備え付けられたテーブルに参考書類を置く家政婦。

その様子に御曹司はげんなりする。

「すぐに坊ちやまの好きなアップルティーをご用意致しますから、それまでにお勉強の準備を整えておいてくださいね」

手短にそう言うと、家政婦は一礼して部屋を出て行った。

彼は溜め息をつくくと、嫌々ベッドから降りた。

ふかふかの絨毯が敷き詰められ、高級な装飾品が溢れた室内は、個人の寝室というにはあまりに広い。

屋敷の二階に位置するこの部屋の窓から見渡せる全ての土地は、彼の父親が所有しているものだ。

「やれやれ……親の都合を息子に押し付けるなんて、なんて勝手なんだろう……」

誰にともなく愚痴を言いながら、参考書など見向きもせずドアへ向かう。

「あゝヤダヤダ。俺様たまには、外で思いつ切り遊びたいんだものね」

今日は父親が外国で購入した洋服や美術品が大量に送られてくる。

その準備の為に屋敷内の人手が少なくなっていることを彼は知っていた。

長い廊下を、屋敷に残っていた家政婦や使用人達の目を盗んで通り抜ける。

一階まで辿り着くと、窓を跨いで庭へ降りた。

そのまま彼は庭を駆け抜け、なんと塀を乗り越え屋敷の敷地内から出てしまった。

「いつも付き人が一緒じゃ、つまらないんだものね……」

その頃、御曹司の勉学担当の家政婦は――

「――お坊ちゃま、アップルティーの用意が出来ましたよ……ん？」

トレーに乗せたティーカップを水平に保ちながら、優しい微笑みでドアを開けた家政婦。

しかし、部屋の中に坊ちゃまはいない。

人の気配すら感じない。

そして、自分が置いたまま触れられた形跡のない参考書……。

「……トイレに行った訳じゃ……ないわよね……」

事態を把握し、思わず溜め息が出た。

しかし、事は重大である。

大金持ちの御曹司である彼は、屋敷の中で甘やかされて育ってきたせいか、世の中というものをよく理解していない。

そして、その立場上、常に彼には誘拐などの危険が伴っている。

そんな世間知らずのお坊ちゃんを、たった一人で街へ出すなど……。

「……こうしちゃいられないわ！ご主人様に知らせなければ……」

アップルティーが零れるのにも構わずそれを参考書の横に置き、家政婦は慌ただしく駆け出した。

「……ふう、なんとかバレずに済んだんだものね……」

ランポウは一本の木に寄り掛かり、遠くに見える自分の屋敷を眺めていた。

ランポウの住む屋敷は、本館より庭の面積の方が広く、門を通ってから本館に辿り着くまで車で十分はかかる。

しかし、彼は逃げ足にだけは自信がある。

お勉強から逃げ出したい一心で、この脱走劇を成功させていた。

屋敷を囲む林の中で一息ついたランポウは、これからどうするかを考えた。

しかし考えるのが面倒になり、とりあえず街へとぶらぶら歩きだす。

——そのうち誰かが迎えに来るだろう……。

思いつきで近くの街へやって来たはいいが、道もわからず、何をしたらいいのかさえもわからなかった。

どこことなく、さびれた感じのある建物が軒を連ね、人通りは極端に少ない。

ついでに天気は曇り。

いかにも怪しげなこの街の様子に、さすがのお気楽者も不安になってくる。

しかし、不安より好奇心の方が勝ってしまった。

適当に街をふらつくだけでも、見たことのない景色の中に自分がいると考えただけで嬉しくなる。

いつの間にか日は傾き、辺りは暗くなりかけていた。

つい深入りし、気がついた時には、もう元来た道がわからなくなっていた。

完全な迷子である。

ランポウが途方に暮れていると、後ろから声をかけられた。

「よおボウズ……こんなところで何やってんだ？」

聞き覚えのない声に恐る恐る振り返ると、予想通り見覚えのない男が、いかにも悪そうな出で立ちでランポウを見下ろしていた。

しかも二人。

片方はやたらと背が高く、もう片方は図体そのものが大きい。

元々小柄なランポウは余計に小さく見えた。

「な、なんの用……ですか……？」

ランポウは逃げ出したい気持ちを抑え、精一杯強がった……つもりだったが、その声は震えて迫力のかけらもない。

「オマエ、ずいぶんいい身なりしてんなあ……金、持ってたろお？」

ニヤニヤと笑いながらランポウに歩み寄る二人組。

ランポウは後ずさったが、あっという間に建物の壁へ追い詰められてしまう。

「……オマエ、もしかしてアレか？近くに豪邸持ってる、大富豪のムスコ」

「ああ？そうなのかあ？」

「え……はあ……」

背が高い方の思いつきに、ランポウは思わず、正直に返事をしてしまった。

その応えが、彼らを満足させるものであったことは言うまでもない。

「……ちよつと来いボウズ」

図体の大きい男が、ランポウの腕を掴んだ。

「っ……な、なにするんだ……！」

ランポウはバタバタと抵抗してみるが、男はびくともしない。

「うるせえガキが！暴れんな！」

もう一人の男の手がランポウの肩を掴む。

——これって……ピンチ！？

その時——

「やめろ」

『雷の守護者』へ遭遇へ（前書き）

ちよつと残酷かも……？

『雷の守護者』く遭遇く

「やめろ」

短く、鋭い声が聞こえ、その場にいた全員の動きが止まった。

男達が慌てて振り向く。

声の主は、男達の背後に立っていた。

こちらも二人。

黒いマントを纏った少年に、顔の右側から首にかけて入れ墨のよ
うなものを入れた少年。

後者の少年は、ランポウ達には興味なさそうに煙草を吸っている
ので、声の主は前者だろう。

「……あんだデメエ……」

図体の大きい男が、ランポウから手を離し、マントの少年の正面
に向き直った。

「邪魔すんならただじゃおかねえぞ……」

図体の男に睨まれても、少年は全く動じない。

「……離してやれ」

それが自分のことだと気づくのに、ランポウは少し時間がかかった。

いろいろなことが一度に起こりすぎて、頭の中が混乱しかけている。

少年の態度が気に障ったらしく、図体の男がいきなり拳を振り上げた。

「おれをムシすんじゃない!!」

声の迫力に、ランポウの身体が思わず震える。

——危ない……!?

振り下ろされた拳が当たる直前、少年は僅かに身を傾け、それかわした。

そして、すぐさま図体の男の背後に回り込み、その首筋へ肘を叩き込んだ。

無駄のない、流れるような動き。

図体の男は成す術もなく、その場に崩れ落ちた。

「ひいつ……!？」

長身の男が小さく悲鳴をあげ、ランポウの肩を離れた。

ランポウはすかさず抜け出し、マントの少年の後ろに隠れる。

少年は自分より少し年上か、さほど変わらないように見えたが、その背中はとても頼もしかった。

「よ……よくもやりやがったな!？」

声が裏返っているが、長身の男は強気だ。

ポケットに手を入れると、キラリと光る物体を抜き取った。

——… ナイフ!!

ランポウは無意識に少年のマントを握りしめていた。

「大丈夫だ」

不意に少年が言った。

「離れている」

言われるままにランポウが数歩下がると、同時に長身の男がナイフを構えて突進してくる。

少年は動かず、ナイフがギリギリまで近づくの待った。

そして、限界まで近づいたところで、身体を僅かに左へ反らす。

そしてナイフが顔の右側を通過すると同時に、男の腹部へ蹴りを入れる。

相手のスピードを利用したことで蹴りの威力が上がり、ナイフを落とした男は後ろへ吹っ飛んだ。

頭は打っていないだろうが、完全に気絶している。

——これがカウンター！

いつかの護身術で習ったはず、と思いながら、ランポウは妙なところで感動していた。

——この人……強い！

「君、すごいな」

ランポウがはしゃいでマントの少年に話かけると、少年は驚いたように振り向いた。

先程まで怯えていたかと思えば、敵がいなくなった途端に元気になるお調子者を前に無理もない。

しかしランポウにはその自覚がない。

「俺様、ランポウっていうんだ。君は？」

少し戸惑いながらも、少年は名乗った。

「……ジョット」

「ジョットか。助けてもらったお礼をしないとね。この近くに俺様

の屋敷があるから、そこで……」

そこまで喋った時、ランポウはようやく異変に気がついた。

最初に倒した図体の男が目を覚ましていたらしく、ジョットのすぐ後ろに立っていた。

男の手には、長身の男が持っていたナイフが握られている。

「オマエだけは許さねえ!!」

男が叫びながらナイフを振り上げた。

しかし、振り下ろすより先に、その腕を掴んだ者がいた。

先程から黙って彼らを見ていた、入れ墨の少年だった。

ジョットにばかり気を取られて、ランポウはその存在を忘れかけていた。

「なんだデメエ!？」

図体の男が何か叫ぶのに構わず、彼は男の腕を容赦なく捻った。

——バキッ——

嫌な音がして、男の手からナイフが落ちる。

「うわぁあぁっ……腕があ……!」

妙な方向に曲がった腕を押さえてうずくまる男。

「……これでわかっただろう。さっさと失せろ」

入れ墨の少年は落ちたナイフを踏み付け、うずくまる男を見下ろして冷たく言い放つ。

「……お、おぼえてろお……！」

男は捨て台詞を吐きながら、長身の男を抱えてそそくさと逃げ去った。

「……ったく、てめえは……素人相手だからって、詰めがアマすぎるんだ」

踏み付けていたナイフを回収しながら、入れ墨の少年はジョットを軽く睨む。

「……そうだな。すまない、G」

ジョットは彼に微笑みを返した。

彼の名はGというらしい。

「……まあ、オレが助けるまでもなかったかもな」

Gはナイフを真つ二つにへし折った。

「……それで？オレ達を招待してくれるんだったか？」

Gがジョットのすぐ後ろを見て少しだけ笑った。

ランポウはすっかりGに怯え、ジョットの後ろに隠れたまま、ただコクリと頷いた。

『雷の守護者』～提案～

『このバカ息子が!!』

壁を一枚隔てていても、隣の部屋の状況は容易に想像できた。

『だから一人で外へ出るなど言っておったのに!勝手にいなくなり
おるから屋敷中大騒ぎじゃ!しかも不良に絡まれて誘拐されかける
など……もしあの方達が助けて下さらなかったら、大変な事になっ
ておったのじゃぞ!?あげくの果てに迷子とは……!!』

ほとんど息継ぎをせずに吐き出された説教によって、ジヨットた
ちは大体のあらすじを知ることができた。

それはランポウのヘナチヨコぶりを象徴する内容に他ならなかつ
たが……。

屋敷に招待すると言ったランポウだったが、自分が迷子だとい
うことを思い出したらしく、泣きそうな顔で逆にジヨットたちにす
ってきた。

Gは呆れてランポウを置いて行こうと言ったが、ジヨットが「も
う少し付き合おう」と引き止めたのだった。

困っている人を放っておけない性格……小さいころから変わらな
い。

たまたま屋敷の使用人が見つけてくれたからよかったものの、そ

うでなかったらどうするつもりだったのか。

二人としてはこれ以上ランポウに関わりたくはなかったが、ランポウと使用人に強く勧められ、半ば強引にこの応接室まで連れて来られたのだった。

勧められた四人掛けのソファで二人が待っていると、しばらくして隣室へ続くドアが開いた。

部屋に入ってきたのは、やけにグッタリしたランポウと、やけにニコニコした小太りの男。

後者の男がランポウの父親で、この屋敷の主であるということ。最初に部屋に通された時に聞いていた。

ランポウたちは、ジョットたちの向かいのソファに腰を降ろした。

「いやあ、見苦しいところをお見せしてしまって申し訳ない！この度はうちのバカ息子が大変なご迷惑をおかけして——」

この後、謝罪だか世間話だかよくわからない話が長々と続いたが、長いのと口調が早いのでよく覚えていない。

しかし、その間ランポウが欠伸をし、ゲンコツを喰らっていたことだけは二人とも覚えていた。

とにかく、二人がなにか口を挟む暇などなかった。

「ところで、何かお困り事はありませんかな？是非お礼をしたいのですが……」

ようやく発言のチャンスが巡ってきたが、また面倒な方向に話が進んでいる。

「礼をされるほどたいしたことは……」

「まあまあ、そうおっしゃらず！」

ジョットが何度か断るも、笑顔で返されてしまう。

Gが苛立ち始めた。

その時、ジョットがふと思い付いた。

「それでは、ひとつだけ……」

「どうぞなんなりと！」

「実は、これから日本に向かう途中だったのですが……」

「ほお？ジャッポーネに？」

「日本へ渡るための手配がまだ……」

「なるほど！日本への船を手配すればよろしいのですかな？」

「……まあ、そういうことです……」

「わかりました！早速手配させましょう！」

主人はそういうと、傍にいた使用人に何かを指示した。

話が早いのはありがたいが、もう少し静かに聞いていただけないだろうか……。

「船の出航には数日かかりますが、よろしいですか？」

主人が笑顔で問いかけてくる。

Gは不機嫌なので、引き続きジョットが答えた。

「はい。ありがとうございました」

「いやいや！この程度のこと、いつでもご協力しますよ！出航の日まで、どうぞうちに泊まっていきなさい！」

「いえ、そこまでしていただくなくても……」

「泊まっていきなよ！」

突然、ランポウが話に割り込んできた。

「船が決まってないなら、まだ泊まる場所も決めてないんでしょ？
うちなら大歓迎だものね」

「しかし……」

「すまぬが……泊まってやってはくれぬかな？」

ランポウの父が、急に声のトーンを落とした。

先程までとは違い、こちらに頼むような言い方だった。

ジョットとGは顔を見合わせる。

「息子も、そなたたちを気に入っておるようじゃし……それに……」

主人はランポウをちらりと見てから、言いにくそうに頭を掻いた。

「たいへん申し訳ないのだが……頼みたいことがあるんじゃない……」

『雷の守護者』へ休憩へ

翌日。

ジヨットとGはランポウの部屋にいた。

ランポウは大人しく机に勉強道具を広げ、問題に挑んでいる。

わからない問題があれば、二人が解き方を教える。

約二時間ほど、ただこれを繰り返していた。

いわゆる、家庭教師のようなものである。

昨日、ランポウの父に頼まれたのがこれだった。

『このバカ息子、本当に怠け者でお。家政婦のいうことも聞かず、勉強も全くしないんで困っておったんじや。同じくらいの年齢で、しかも恩人であるのそなたたちのいうことなら聞くのではないかと思つてな。この数日で、勉強のやり方だけでも教えてやつてはくれぬかのお？そうすればランポウも少しは自信がつくのではないかと……いや、恩人に頼むようなことではないことはわかつておるんじやが、他に頼める人物が……雇つても家政婦とあまり変わらないし――』

と、要約してもこの長さの頼み事をされたのだった。

頼まれると弱い性格のジヨットはこれを承諾してしまい、今に至る。

尤も、これを嫌がっていたのはGのほうなのだが。

正直こんなやりかたで効果があるのか、Gには疑問だった。

しかし、ランポウはジョットに非常に懐いているためか、ジョットが教えると素直に勉強を進める。

これではジョットが去った後が大変だと、Gはひそかに思った。

「……今日はこの辺でいいだろう」

ジョットが言うと、ランポウは長い溜め息をついて机に突っ伏した。

「……俺様もう疲れたんだものね……」

「やればできるじゃないか」

「ジョットが教えてくれなきゃこんなにやらないんだものね」

ランポウの言葉に、ジョットは困ったように笑った。

そのとき、誰かが部屋のドアをノックした。

「お坊ちやま、アップルティーをご用意いたしました」

屋敷のどこかで聞いた家政婦の声だった。

「入っていいよ」

ランポウが許可すると、失礼しますと聞こえてからドアが開いた。彼女が手に持った銀のトレーには、三人分のティーカップとティーポットが乗せられていた。

「お勉強お疲れ様です。どれくらい進まれましたか？」

家政婦の問いに、ジョットは参考書を指差して説明した。

「そんなにですか！？『あの』坊ちゃまが！？」

驚いた家政婦の言葉に、ランポウは複雑な顔をする。

Gが見ていた限りでは、驚くようなペースではないのだが……それだけ普段のランポウのやる気がないということだろう。

「俺様だつてやればできるんだものね……」

それなのにこういう発言ができるのは、今日の勉強で自信がついたからなのか、ただ単に自信過剰なだけなのか。

おそらく両方だろうとGは推測した。

家政婦がティーカップにアップルティーを注いでいく。

「本当、お二人が来てくださって助かります！私どもにはとても手に負えなかった坊ちゃまが、こんないい子になるなんて……！本当ならずつとここにいていただきたところですが、そういう訳に

はいきませんものねえ。是非、坊ちゃんにやる気を起こさせる秘訣を――」

なぜこの屋敷の者たちは皆、早口で大袈裟なのか……。

家政婦のおしゃべりは終わる気配を見せず、ジョットは手渡されたアップルティーを飲みながら適当に相槌をうつていた。

そこへ、またノックの音。

「あの……お話し中失礼します」

ドアの向こうから聞こえたのは、か細い女の子の声だった。

家政婦の話は廊下まで聞こえているらしい。

あらヤダ、と家政婦が口を押さえた。

「ランポウ様、ご主人様がお呼びです」

「ええ……」

女の子の言葉に、ランポウが嫌そうな声を漏らした。

「一体なんの用だものねえ……」

ぶつぶつと呟きながら、ランポウが部屋のドアを開けた。

ランポウが廊下に出てドアを閉めるまでの一瞬、先程の声の女の子が見えた。

ジョットやGよりは年上だろうが、まだ少女と表現してもいいほど若かった。

ランポウと女の子の足音が遠ざかると、家政婦はまた話し始めた。

「あの子は家政婦見習いで、先月からこのお屋敷に勤めているんですけど、まだ仕事に慣れてないのかミスが多くて……今日は特に緊張していたみたいですね、お客様が来ているからかしら？もしかしてあの子……」

さすがにジョットもうんざりしてきたが、家政婦の話はまだまだ終わりが見えない。

しかし、ふと時計を見ると、家政婦は慌てて立ち上がった。

「いけない！もうこんな時間！つい夢中になって……お付き合いさせてしまつて申し訳ありません」

「いや……」

「私はこれで失礼します。お屋敷の敷地内は自由に出入りできますが、ご主人様のお部屋には入らないようお願いします」

注意事項まで早口で告げ、家政婦は去っていった。

『雷の守護者』〈情報〉

ようやく部屋が静かになり、ジヨットが大きく溜め息をついた。

「……本当、てめえは昔から面倒な奴に好かれるよな……」

Gが他人事のように笑ってアップルティーを飲んだ。

「Gが相手をしないからだろう……見ていないで少しは手伝ってくれれば……」

ジヨットは一応反論してみるが、Gが家政婦の話し相手をしている場面をどうしても想像することができない。

もう一度溜め息をつくとき、カップに残っていたアップルティーを飲みほした。

「俺はもう少し寝る」

同じようにカップを空にしたGがそう言って立ち上がった。

「昨日は考え事しててあんまり寝てねえんだ」

「そうか……それなら、わざわざランポウの勉強に付き合ってくれなくてもよかったんだが……」

「ああ……。最初はそのつもりだったが、気が変ってな」

「……そうか……」

ジョットは不思議そうな顔をしたが、それ以上は訊かなかった。

Gが自分の部屋に戻ると、ジョットもランポウの部屋を出た。

ジョットとGはそれぞれ、同じ造りの部屋を借りていた。

客人用に様々な日用品が置いてあり、どれもがやたら高級品だったりする。

全てランポウたちの好意なのでありがたくはあるが、ここまでされる逆に応じ謝らない。

部屋を出たジョットは、ふと思いついて中庭へ向かった。

屋敷を案内されたときに少しだけ見た、忙しそうに行き来する使用人たちが気になっていたのだった。

ジョットが中庭に出ると、そこにいたのは家政婦一人だけだった。

よく見ると、先ほどランポウを呼びに来たあの少女だ。

「あつ……」

少女もジョットに気づいたようだ。

パタパタと近寄ってきた。

「えっと、ジョット様……ですよね……？」

また緊張しているのか、少し顔が赤い。

「何かご用でしょうか？」

「いや……昨日見かけた時、忙しそうにしていたから気になって……」

「ああ……あれは、倉庫の荷物を運び出していたんです」

「荷物……？」

「ご主人様が外国で購入した品物です。一度にたくさん送られてくるので、人出がいるんです。私は貴重品には触らせてもらえないので、庭の掃除をしていたのですが……」

「そうか……何か手伝えることは……？」

「……へ？いえっ、そんな……！」

少女はとんでもないというように首を振った。

「人出が足りないということはありませんから、どうかお気遣いなく……。それに、お客様に手伝わせてしまったては、私が怒られてしまいます」

必死な少女の姿は、年上ながらどこか微笑ましい。

ジョットもつい笑ってしまった。

少女は不思議そうな顔をしている。

「……それはすまなかった。何もすることがなくてな……」

「いえ……」

すると、少女は少し考えてからこう言った。

「では……倉庫を見えますか？たいしたものはないかもしれませんが……」

「それはありがたいが……部外者がいても邪魔になるだけではないのか？」

「そんなことはありませんよ。ただ、危険なものもありますので、荷物には触らないようお願いします」

「危険なもの……？」

「はい。銃などの武器も、あそこに運ばれているんです。あっ、正規ルートですのでご安心を」

問題はそこではない気がするが……。

「ジョット様もご存じかと思いますが……この辺りは物騒ですので」

「……なるほどな……」

その時、武器とは無縁なお気楽者の声が聞こえてきた。

「ジヨット〜！ここにいたのか」

ランポウが走って二人に近づいて来る。

「あつ、ジヨット様……」

少女が小声で言った。

「ランポウ様には、武器のことは秘密にしてください。面白がってしまうといけませんので……」

「確かにそれは困るな……」

ジヨットが苦笑して頷いた。

「何話してるの？」

ランポウが興味津々に訊いてくる。

「ジヨット様に倉庫を案内することになったんです」

少女が答えると、ランポウの目が輝いた。

「それなら俺様も行くよ」

「え……？」

「俺様も倉庫には入ったことないんだものね」

「はあ……あの、ジヨット様はよろしいですか？」

「オレは構わない」

「わかりました……ではご案内します」

そう言っ て歩き始めた少女だったが、思い出したように振り返った。

「申し遅れました！私、セイラと申します」

少女——セイラは、また顔を赤くした。

「その……よ、よろしく願います……」

『雷の守護者』〜異変〜

「ここが倉庫になります」

セイラに案内されたのは、敷地の外にある大きな四角い建物の前だった。

「何かあるといけませんから……一旦ここで中身を確認してから、敷地内に運ぶんです」

セイラが平然と言った。

ジョットはどうしても気になり、質問してみた。

「……何かあったことがあるのか？」

「私は見たわけではないんですが、一回だけ、直接屋敷に運んだ衣類に、針が入っていたそうです。開封した家政婦が怪我をしたとか」

……聞かなければよかったか……ランポウの顔が暗くなった。

「ただの裁縫針でしたし、心配なさらなくとも、今は警戒していますから大丈夫ですよ。しかし……さっきも言いましたけど、念のため荷物には触らないでくださいね」

セイラの言葉に、ランポウはコクコク頷いた。

「ランポウ……怖いならついてこなくていい」

ジョットは、さつきからくつついてくるランポウに、少しきつめに言った。

「……けど、見たいんだものね……」

怖いというのは否定しないランポウ。

「あの……やっぱり別の場所にしましょうか？ 倉庫なんてわざわざお見せするほどのものでは……」

セイラが心配そうに問うが、ここまできたらランポウも意地になっている。

「ここでいいんだ、早く中を見せてよ」

家政婦に対しては強気なランポウ。

「はあ……わかりました」

セイラはそう答えて、重そうな倉庫の入り口を開いた。

「ご案内した私が言うのもなんですが……普通の倉庫ですよ」

セイラは簡単に言ったが、普通とは呼べないほど、庫内はとても広がった。

薄暗いながらも、壁は分厚く頑丈なのがわかる。

その中で、十数人の使用人が、忙しく荷物を開封したり整理したりしていた。

「一応頑丈な造りになっているので、もし爆発物が持ち込まれたとしても外部に被害はないでしょう」

なぜこの少女は、ランポウが怖がるようなことばかり言うのだろうか……。

そのとき、倉庫の奥から聞き覚えのある声が響いてきた。

「あら、坊ちゃまにジヨット様！」

ドタドタとこちらに走ってきたのは、話の長いあの家政婦だった。

「あらあら、こんなところにいらしても、面白いものなどありませんよ？ セイラ、ご案内するなら他にも——」

「いや……オレが見たいと言ったんだ」

家政婦の言葉を、ジヨットが遮った。

セイラを庇う意味もあったが、なにより話を長引かせたくない。

「それにしても、倉庫というには立派な建物だ。それほど大量の買い物をするのか？」

ジヨットの問いに、家政婦は少しだけ困ったような顔をして頷いた。

「それはもう……今はだいぶ片付いてきましたけど、昨日は運び込

また荷物で、倉庫の奥が見えませんでしたから」

家政婦の言う通り、今は確かに倉庫の奥まで道ができているが、その両側はまだ天井近くまで木箱や包みが積まれている。

これで『片付いてきた』とは相当のようだ。

「……そんなに何を買っているんだ？」

ジョットが呆れ気味に聞くと、家政婦は傍の木箱から青いケースを取り出した。

今気づいたが、家政婦や使用人は皆、貴重品を触るための白い手袋をはめていた。

「たとえば……この指輪です」

ケースを開くと、中には青い宝石がちりばめられたシルバーのリングが納められていた。

「サファイアをあしらったデザインが気に入られたようで、この木箱には他にもサファイアを使ったアクセサリーが多数入っています」

確かに、木箱の中には指輪のケースと似たデザインのケースが敷き詰められている。

「こういう小さなものならいくら買っていたいただいてもいいんですけどね……」

家政婦が倉庫の奥を指差す。

使用人が三人掛かりで大きな荷物を運び出そうとしていた。

形からして、おそらく彫刻か何かだろう。

高さは二メートル近くある。

「……やはり手伝おうか……？」

「いえ、本当に大丈夫ですから」

ジョットがもう一度提案したが、セイラは素早く断った。

「そついえばさあ……」

ランポウが興味津々な声で言った。

「ジョットもカッコイイ指輪してるよね！」

「……ああ、指輪の話ですか」

もう終わった話題だと思っていたのか、セイラは理解するのに時間がかかったようだ。

ランポウは指輪を指差した。

「カッコイイけどさ、ちょっと大きいんじゃないかな？」

確かに、ジョットの指輪は気を抜くと指から外れてしまいそうなほどぶかぶかだった。

「……これでいいんだ」

ジョットはそう呟いて、左手で指輪に触れた。

「これはオレにとって、特別な指輪だから……」

「ふーん……？」

ランポウは納得していないようだが、言葉が思いつかなかったのか黙っていた。

「セイラ、お荷物を傷つけてしまうといけないから、これをしていなさい」

家政婦が、予備用と思われる白い手袋をセイラに渡している。

その時だった。

ジョットはふと、気配のようなものを感じた。

使用人たちのものとは違うそれは、例えるなら――

――……殺気……？

「ジョット様？」

手袋をつけたセイラが、不思議そうにジョットの顔を覗き込んだ。

「どうかなさいましたか？」

気配は一瞬だった。

次の瞬間には既に消えていた。

「いや……なんでもない……」

『雷の守護者』～発生～

その頃Gは、欠伸をしながら誰もいない廊下を歩いていた。

部屋にいてもまた考え事をしてしまい、結局眠れなかった。

「……ったく、ジョットはどこに行っただ……」

ジョットを捜しているのは、一緒にいないときに屋敷の住人に話し掛けられると面倒だからだ。

しかし、そんな時に限って、一番面倒な人物に会ってしまうものである。

「おお、G殿ではないか！」

背後から聞こえてきたのは、言うまでもなく、今一番聞きたくない声。

Gが渋々振り返ると、廊下の奥から執事らしき人物を従えたランボウの父親が、手を振りながら近づいてくるのが目に入った。

「……どうも」

Gは舌打ちしたい気持ちを抑え、軽く会釈した。

こういつ会話は全てジョットに任せていたので、Gは敬語が苦手だった。

「夕べはよく眠れましたかな？」

よりによってその質問……。

「……まあ……」

曖昧な返事しかできないG。

しかし、どんな返事であろうと、彼が気にしない性格だということとは昨日の時点であっていた。

「ところで、ジョット殿は一緒ではないのかな？」

主人の問いに、Gは自分も捜していると答えた。

とにかくさつさと話を終わらせたい。

しかし主人は勝手に話し始める。

「まあ、ランポウなら、おそらくジョット殿にくっついてるんじゃないかな。あまり迷惑をかけていないといいんじゃないかな……」

それを聞いて、Gは溜め息をつきたくなった。

まだ一人でいたほうがマシかもしれない。

「ランポウが一緒なら、敷地内からは出ていないじやろつ。先程、ランポウにきつく言い聞かせたからの」

それについてGは頷くことができない。

父親の長い説教を、あのランポウがどこまで聞いていられたか…
…。

「旦那様、そろそろお時間が……」

先程から黙っていた執事が、突然口を開いた。

「おお、そうじゃったな！すまぬがG殿、仕事があるのでこれで失礼する！」

主人は笑顔でそう言い残すと、執事を従えて元気に去っていった。たったこれだけの会話だったが、Gにはとてつもない疲労感が残った。

やはり部屋で大人しくしていよう……。

Gは振り返ろうとして、ふと窓の外を見た。

遠くに見える屋敷の門の陰に、誰かがいたような気がした。

よく目を凝らしてみる。

気のせいではないようだ。

見覚えのある顔だった。

次の瞬間、Gの目がはっと見開いた。

「あいつは……!？」

嫌な予感がした。

気がついたら、Gは走り出していた。

「こんなところにも電話があるのか……」

倉庫に入った時はわからなかったが、入口の横に簡単な台があり、屋敷に繋がる電話が置かれていた。

「倉庫は屋敷の敷地外にありますから、何かあった時、すぐ連絡が取れるようになってるんです」

セイラが説明すると、ランポウが面白がって電話に手を伸ばそうとした。

「あつ、この電話は緊急用なので、屋敷の電話にしか繋がりませんが……」

セイラが言うと、ランポウはおずおずと手を引っ込めた。

父親が出たら困ると思っただけらしい。

屋敷の電話を、主人自らが受けるとは考え難いが……。

「やはり、ただの倉庫にしておくには勿体ない建物だな」

改めてジヨットが言うと、セイラは首を傾げる。

「……普通の倉庫だと思いますけど……」

どうやら彼女は、この屋敷以外で働いたことがないようだ……。

「でも倉庫は、安全確認のために、少しの間荷物を置いておくだけですから」

セイラが解説してくれる。

しかしランポウは、倉庫見学に少し飽き始めているようだ。

それでもセイラは気にしない。

「荷物の確認が済めば、もっと警備の厳重な屋敷内に運んでしまえますし、ここを強化しても意味がないんですけどね……」

セイラの言うことは尤もだが、『どうせ造るなら頑丈な方がいい』という単純な考えなのだろう。

「……あの主人らしいな……」

ジヨットの呟きの意味がわからなかったらしく、セイラは「え？」と聞き返す。

「いや——」

——なんでもない、と続けようとした。

しかし、ジョットはまた感じたのだ。

あの……殺気のような気配を。

嫌な予感がした。

何故か昔から、こういう直感がよく当たるのだ。

しかもこの気配、今度は――

――……複数……!!?

その時だった。

閉じられていた倉庫の扉が、勢いよく開いた。

『動くな!!!』

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8268m/>

ボンゴレの掟

2010年10月9日20時17分発行